

ハロルド・J・ラスキにおける法と倫理

野 村 博

1. はじめに

法と倫理、または法律と道德との関係は、「法哲学の喜望峰」ともいわれる難問であって、古代ギリシア以来さまざまな見解が主張されてきたが、それらの見解をきわめて大まかに要約して、――

法律も道德も、ともに歴史的・発生的には、社会慣習から派生してきたもので、社会的存在としての人間が、所属している社会ないし国家において「ともに生きる」ために遵守しなければならない規範を意味するということ。

さらに両者の関係については、理念的にいて、法律は道德を客観化した強制規範であり、道德は法律を統制し基礎づける規制原理であるということ。

このようにいうことに対しては、一般的に大した異論はないかも知れないが、しかし、形式的ないし理念的にではなく、実質的ないし現実的には、道德は法律によってその内実が規定され、さらに法律は、経済により根本的な制約を受ける政治によって規制されている、といえるのではないだろうか。

この小論で私は、法と倫理をきわめて現実的・具体的に眺めているハロルド・ラスキ (Harold Joseph Laski, 1893~1950) を取りあげ、数多い彼の著書のなかで特に『国家論』(“The State in Theory and Practice” 1935)⁽¹⁾ を中心にみて、考察してみたいと思う。

2. 国家——その理念と現実

周知のとおり、ラスキは、マッキーヴァ (Robert Morrison MacIver, 1882~

）とともに、いわゆる多元的国家論 (Pluralistic Theory of the State) の創始者の一人である。多元的国家論は、いうまでもなく、もともと国家の legal omnipotence (法的全知全能性) に対する要求を徹底的に拒否し、これに反抗することから生まれた理論であって、国家と社会との同一視を極力排斥し、国家を Associations (利益結合社会) の一つとして、他のいろいろの Associations と同列におき、Community (基礎共同社会) から区別するものである。

ラスキは、その思想的発展の初期において、反ヘーゲル主義者として国家主権論を学説史的に比較研究し、多元的国家論の立場から、国家主義に対して堂々の論陣を張ったのであるが、1932年のソヴィエット連邦への旅行やドイツとイタリアにおけるファシズムの抬頭などを転機にして、コミュニズムへアプローチし、やがては、「同意による革命」の荷ない手として労働者の地位を重視し、社会主義的民主主義を力説したのである。⁽²⁾

さて、ラスキは、その『国家論』において、「国家とは、その市民にとって、国家がなすところのことであって、国家は単に国家であるがゆえに正当なものとは見なされるのではない。……市民は、単なる国家の哲学的目的に関心をもつのではなく、その日常生活において経験されるような国家の現実の過程の結果に関心をもつのである。……(しかし) 哲学者は、主として、国家の理想的形態を組み立て、その意味内容を諸国家の現実的経験に当てはめることで満足してきた。この理想的形態は、きわめて大ざっぱにいて、哲学者自身が自分の経験に照らして望ましいと考えたものであった。つまり、哲学者は、自分の自叙伝を客体化して、現実の綱領と規準にしたのである。……(したがって) われわれは、ある個人の属する現実の国家の性質を判断してしまうまでは、ヘーゲルのように、その個人の『最高の義務は国家の一員たることである。』とはいうことができない。」⁽³⁾

といっている。そして、ラスキによれば、国家そのものは、厳密に言えば、決して行動はしない。国家は、その政策を決定する権限を得た人々、すなわ

ち、みずからが自由にできる最高強制権力を国家の名において運用する一団の人々、つまり政府によって、代わりに行動をさせるのである。

すなわち、ラスキによれば、

「われわれが直面するあらゆる国家の行為は、事実上は政府の行為である。」そして、「国家の意志は、その法律のなかにある。が、法律の内容に実体と効果を与えるのは、政府である。」⁽⁴⁾

国家と政府とを明確に区別しなければならないことは、政治学の基本的定理の一つであって、理論的な意義をもつものであるが、国家の行為が実は政府の行為であるという事実を認識することが、現実の国家を正しく理解するうえで必要欠くべからざる重要性をもつ、とラスキはいうのである。そして、さらに、ラスキによれば、国家を他の利益結合社会から区別している主権、すなわち最高強制権力、というものの基礎は、みずからの意志に強制的に服従させるために、必要とあらば国家の軍隊を使用することができる権力にある。「国家の軍隊の使用を左右する人々が、事実上、国家主権の持ち主である。」⁽⁵⁾ したがって、「政府に対する軍隊の忠誠心が疑わしくならない限り、いかなる革命も成功する見込みは、まずないのである。ここに、主権の心髄が存在する。」⁽⁶⁾

ところで、以上のような議論は、いうまでもなく、国家がみずから実現しようと努力していると自称している国家目的を論じているのではなく、日常的事実における国家の権力組織としての事実を論じているのにすぎないのである。したがって、ラスキによれば、国家目的という価値の問題を考察するためには、われわれは倫理学に依拠しなければならない。すなわち、彼によれば、

「あらゆる社会的関係を判断する標準は、倫理学のなかに、しかも倫理学のなかにだけ、発見することができるのである。いうまでもなく、倫理学の基準は、われわれが知っている経験に基づいていなければならない。倫理学における善行の概念、価値の尺度は、われわれが知っているような種類の世界に住んでいる人間によって、社会的に見て、達成できるものでなければならない。ユートピアでしか行なうことができないような価値基準は、この実世間では真

面目に論ずることができないのである。」⁽⁷⁾

かくして、ラスキは、

「国家の目的は、その市民の欲望を最大限に満足させることでなければならぬ。」⁽⁸⁾ ということだけを仮定するのである。

しかしながら、現実においては、ラスキによると、

「国家の目的は、善かれ悪しかれ、国家主権を運用する人々によって、自分たちの擁護しようとする善の基準に則して、引き合いに出されるのである。」⁽⁹⁾
「そもそも、われわれ人間は、ラスキによると、みな自分の経験の囚人であるから、通常は無意識的に自分の個人的洞察と真理とを同一視してしまうのであって、あらゆる社会理論の要請にしても、実は、かかる要請をつくる個々の思想家の経験から生まれた価値判断なのである。」

そこでラスキは、ジョン・スチュアート・ミルに基礎をおく自由主義的国家論の欠陥を是正するために生まれてきていた当時流行の理想主義的国家論を取りあげ、批判検討のメスを振るうのであるが、このヘーゲル流の理想主義的国家論の代表的な唱道者として、ラスキは、バーナード・ボサンケ (Bernard Bosanquet, 1848~1923) を直接批判の対象にしている。

したがって、私は、ここで、ラスキが行なった理想主義的国家論に対する批判を見るまえに、まず、ボサンケ自身の国家論を、その『哲学的国家論』(The Philosophical Theory of the State, 1899)⁽¹⁰⁾ によって、ごく簡単に概観してみたいと思う。

3. 理想主義的国家論

さて、ボサンケによると、政治義務の真の根拠は、「自治」(self-government)にある。⁽¹¹⁾ この「自治」という概念は、ベンサムやミルなどの個人主義的な功利的快樂主義では解決できないパラドックスであるが、それは、個人と社会の絶対的対立観に立脚するからである。これに反して、ルソーのいう「共同

我」(common self)の概念は、自・他の消極的・否定的関係はもとより、自我と政治(法律)の否定的対立関係をも解消させるものである。⁽¹²⁾

すなわち、ボサンケによると、われわれ人間には、日々経験し意識する意志、すなわち「現実の意志」(actual will)とは別に、「ある意味ではわれわれではないが、しかし、われわれに対して命令として認められる意志」、⁽¹³⁾すなわち「真実の意志」(real will)がある。人間の道徳的目的は、この real will を実現することであって、これこそ、恣意とは異なる真の自由にはかならない。ところで、この real will とは、ボサンケによると、具体的には国家の意志である。したがって、われわれが国家によって「自由であるように強制される」⁽¹⁴⁾ということ、いいかえれば、国家の命令に服従するということは、われわれが本来のわれわれ自身となることであって、道徳的目的の実現であり、政治義務の根拠もまた、同時にここにあるのである。かくて、ボサンケにおいては、moral duty と political obligation とは、同一のものである、とすることによって、自治のパラドックスが解決されるのである。

ところで、ボサンケによると、国家は、「強制力を合法的に行使する一つの単位として習慣的に認められた社会」⁽¹⁵⁾である。国家は、単なる政治的組織ではない。「国家は、家族・同業者仲間・教会・大学などにいたる、人々の生活を決定するあらゆる階層の制度を包括するものである。」⁽¹⁶⁾したがって、国家は、万物のうえにあって、「生命の生きて働く概念」⁽¹⁷⁾であり、「あらゆる制度の有効な批判」⁽¹⁸⁾として必然的に強制力であるから、いかなる制度も、この国家の動きに取り入れられてはじめて生き生きとした精神的存在となるのである。要するに、「国家は、われわれの生活のはずみ車である。」⁽¹⁹⁾

かくて国家は、ボサンケにおいて、「道徳的価値の守護者」であり、善の権化である。道徳も政治がなければ存在できないことになって、まさに、ここに、ボサンケの理想主義的国家論の特異性が端的に示されているといえるのである。

さて、ラスキは、以上のようなボサンケの理想主義的国家論を批判するに際

して、ホップハウス (Leonard Trelawney Hobhouse, 1864~1929) をかなり援用しているの、私は、ここで、ホップハウスの『形而上学的国家論——その批判』(The Metaphysical Theory of the State——A Criticism, 1918)⁽²⁰⁾ を、これまたごく簡単に眺めてみたいと思う。

ホップハウスによると、およそ社会について究明する場合に、社会の現実と理想を明確に区別し、現実についての科学的認識を理想実現に対する手段として活用することが大切であるが、この理想と現実との区別を否認し、社会(国家)を理想的なものの表現として概念把握する社会論の形態がある。それが、すなわち、ヘーゲル、ボサンケ一派の「形而上学的国家論」である。⁽²¹⁾

この形而上学的国家論は、ホップハウスによると、17~18世紀を通じて教会や法律などの既存の権威に対する批判挑戦として、個人を重視し、個人が構成する社会集団の实在性を拒否した「誇張された個人主義」に反対して、「社会は、これを構成する個人より以上の、個人とはまったく異なった実体である。」⁽²²⁾ と考える有機体理論に基づいている。

ところで、ボサンケを唱道者とする、この形而上学的国家論は、ホップハウスによると、次のような諸点で誤謬を犯している、というのである。すなわち、

(1) 形而上学的国家論は、その究明方法が倫理的でも科学的でもなく、したがって、理想的なものと現実的なものとを混同しているのである。国家をヘーゲル的に高揚することは、「形而上学的夢想家の狂想的言説」⁽²³⁾ にほかならない。

(2) 自・他の現実的対立を「共同我」という概念に解消させれば、他我是存在せず、したがって、強制力ということもありえないことになる。⁽²⁴⁾

(3) 国家と社会とを混同し、したがって、政治義務と道徳的義務とを誤って同一視している。これが、形而上学的国家論の中心的な誤謬である。⁽²⁵⁾

(4) 形而上学的国家論は、「全体は、その部分の総和よりも大である。」という有機体説の原理に基づいているが、全体には、これを構成する個物の協同的

な働きより以外に何も存在しないのである。⁽²⁶⁾

(5) われわれの行為が **real will** に一致するとき、われわれは道徳的に自由であって、**real will** とは一般意志であり、国家の意志である、というボサンケの考えは、意志をあたかも一つの実体的存在であるかのように語っていて、現実の社会が単一の意志ではなく、もろもろの意志に立脚している、という事実を無視しているのである。⁽²⁷⁾

さて、以上が、ボサンケに対するホップハウスの批判の要点であるが、このようなホップハウスの形而上学的国家論の批判を援用しながら、ラスキがボサンケ流の理想主義的国家論に対して行なっている批判を、次に眺めてみよう。

4. 理想主義的国家論の批判

ラスキによると、

(1) 「個人の **real will** は、国家の意志に等しい。」という理想主義者の主張は、意志の本質の分析において、心理学的に不適當である。「理想主義者のように、私の属する構成された社会が意志することを私が意志するときだけに、私は全体的に私自身である、と説くのは、まったく人格の本質を見損うものである。」⁽²⁸⁾

(2) 理想主義的国家論のもう一つの弱点は、個性の本質を理解していないことである。個性の本質を、究極的な個人の孤立に見い出さずに、個人が参与する全体の生活に対して、この個人の孤立が寄与することにだけ見い出しているのであるから、この見解によれば、個人の孤立は、真実ではなくて、ただ個人が没入している共同の経験を分有するすべての人々の孤立と一体をなしていることになって、そこには、いわゆる拘束も自由も、ともにありえないことになるのである。⁽²⁹⁾

(3) 理想主義者は、一つの「共同善」(**common good**) という概念によって、社会の全成員により抱かれ、国家をとおして具体化されるものと考えて、政治

義務の弁護を基礎づけているが、この共同善という概念は、きわめて多種多様な概念を一つのことばでまとめた曖昧なものである。⁽³⁰⁾

(4) われわれ市民は、国家をば、国家みずからが公言する意図によってではなく、国家の現実の行動がわれわれに対してもつ意味によって判断するのに、理想主義的国家論は、この否むことのできない事実を無視しているのである。⁽³¹⁾

(5) さらに、理想主義的国家論は、「全体は、その諸部分よりも大である。」という前提に基づいているが、この有機体説では、「国家によって企てられた行動」とは、実は、「国家の名において行動する政府によって企てられた行動」を意味しているという現実の事実について、何ら有効な説明にはならないのである。⁽³²⁾

以上、これを要するに、ラスキによれば、理想主義的国家論の基本的な誤謬は、その形而上学的難点についてはホップハウスの論じているとおりであるとしても、ともかくも、「国家の理想的目的と政府の現実的政策とを不断に混同していることに基づいている。」⁽³³⁾ ラスキによれば、「市民は、国家の本質を国家の政府の行為から推論するのであって、それ以外の仕方では、これを知ることができないのである。」⁽³⁴⁾ したがって、「政府の行為を説明の中心としなような国家論は、適切ではない。国家とは、国家の政府の行動である。国家の理想的目的を達成するために政府が行なわなければならないこととして、あらゆる理論が要求していることは、単に国家を判断する場合の基準であって、その実際の本質を示す指標ではないのである。」⁽³⁵⁾

5. 現実世界における国家

ラスキによれば、

「国家の性格を、その観念においてではなく、むしろその現実性において分析することこそ、政治哲学の第一の任務である。国家の真の本質は、国家が自称するところではなく、国家の実際によって知ることができる。大体これまで

の政治哲学は、説明することよりも、むしろ弁護することに努めてきた。すなわち、未来の解放を可能にすることよりも、むしろ過去を擁護することに熱心であった。」⁽³⁶⁾

そもそも、ラスキにとって、

「国家がその市民の服従を要求する権利は、市民に対して彼らの欲望の最大の満足を保障してやろうとする意志と能力を国家がもっているか否かにかかっている。」⁽³⁷⁾ そして、「われわれの国家に対する服従は、国家の振る舞いに対するわれわれの判断の関数 (function) であって、また、それ以外のものではありえないのである。」⁽³⁸⁾

ラスキのこばによれば、もともと、「国家が私に服従を要求する権限は、国家が私の諸権利を認めることの関数であり、」⁽³⁹⁾ したがって、「国家の主権は、常に条件法で書かれたエッセイである。」⁽⁴⁰⁾ そこで、国家の機能が、国家の支配下にある社会の市民全体のためではなく、ある特定の集団の利益のために著しく片寄っているときには、おそかれ早かれ、革命 (体制の変革) が起こるのである。

ラスキによると、およそ、どのような形態の社会にしても、その社会が生計をたてる方法が、社会の基底的な要因をなしている。そして、あらゆる社会関係は、それを満足させなければ生活が存続できないような根本的な物質的欲望を充足させる用意を基礎にもたなければならない。したがって、どのような社会を分析研究しても、その制度や文化と、物質的欲望を充足させる方法との間には、いつでも必ず密接な関係がみられるのである。すなわち、「物質的欲望を充足させる方法が変化すれば、それに伴って、その社会の制度や文化も変化するのである。」⁽⁴¹⁾ つまりは、「経済的生産方法の変化が、社会関係の変化を決定するのである。」⁽⁴²⁾ さらに、ラスキのこばによれば、「わが建築様式も、わが文学の形式も、わが科学の性格も、およそわれわれが文明と称しているすべてのものの基礎的な骨組も、結局のところ、これらの生産関係によって決定されるのである。」⁽⁴³⁾

そこで、あらゆる社会が一つの社会として存続するためには、何らかの安定した生産の諸関係を維持するように努めなければならない。社会は、かかる生産の諸関係を存続させるために、強制的な手段を必要とする。この手段こそ、歴史的にみて、国家にほかならない。⁽⁴⁴⁾

ところで、国家は、政府と称される一団の人々によって行動するが、この政府は、生産過程に対する特殊な関係によって必然的に左右され、みずからの社会的諸関係の関数である価値体系を生み出すのである。したがって、国家とは、自分たちが善であると認める目的を実現するために命令を発する一団の人々のことである。⁽⁴⁵⁾

つまり、ラスキによれば、
「国家は、それ自体の存在の法則からして、諸階級の間に処して中立的ではありえない。国家は、国家であるがゆえに、どちらかの味方になることを余儀なくされるのである。国家の政府は、その社会の生活を維持している生産制度を経済的に支配する階級の執行委員会として、行動しなければならないのである。」⁽⁴⁶⁾

6. 法律——その理念と現実

さて、ラスキによれば、
「法律とは、社会の階級構成の目的を確保し、そして必要ならば、国家の強制権力によって強制的に施行される行動の諸規則にほかならない。」⁽⁴⁷⁾
すなわち、法律とは、一言でいえば、「国家目的を成就しようとする一群の規則」⁽⁴⁸⁾である。ところで、ラスキによれば、国家の目的は、現実的には、社会の階級関係の制度を維持することであるから、したがって、国家の最高強制権力が背後におかれている法律も、必然的に同じ目的をもっているのである。

したがって、法律というものは、しばしばいわれるように、「有用である」

とか、「理性を具現している」とか、あるいはさらに、「社会の一般目的を表現している」とかいうことは、問題の提出ではあっても、その解決ではありえない。というのは、このような法律の説明は、法律が、「誰にとって有用であるのか」「誰の理性を具現しているのか」、さらに、「誰によって考えられた社会の一般目的を表現しているのか」ということを問うことにほかならないからである。⁽⁴⁹⁾

だから、ラスキによれば、たとえば、封建国家において法律とされるのは、土地の所有主たちにとって法律が有用であるからにほかならない。法律が具現する理性は、土地所有主たちの理性である。法律が達成しようとする社会の一般目的は、その目的が何でなければならないか、ということについて考えた彼ら土地所有主たちの概念である。すなわち、法律が実施しようとする行動の規準は、どのようにすれば自分たちの要求を最も完全に、そして大きくすることができるか、ということについて土地所有主たちが抱く概念から引き出されるのである。同様に、資本主義社会においては、法律の本質は、資本の所有主たちによって支配的に決定されるのである。⁽⁵⁰⁾

このように考えてくるとき、ラスキにおいては、生産手段の私有に基づく階級のない社会が存在しないとすれば、狭い形式的な意味を除いて、「法の前の平等」ということは、ありえない。したがって、また、階級関係の制度が存在する社会においては、国家権力を掌握して法律の要請を限定しなすより以外には、新しい善概念を確立することはできないのである。

だから、「どのような政治哲学も、国家権力はその支配する社会全体の福祉を増進する手段である、というような概念をもっては、有効に働くことはできないのである。」⁽⁵¹⁾

つまり、われわれは、国家を、その観念においてではなく、その現実の姿において、把握しなければならない。国家の真の本質は、国家が自称するところにあるのではなく、国家の実際の行動にあるからである。このように、国家の本質を現実の相において考えてくるとき、ラスキによれば、「国家の政治形態

がどのようなものであっても、その社会の経済的要請を変えないかぎり、その社会の倫理の性格に何ら本質的な変化はありえない⁽⁵²⁾」こととなる。しかし、社会の経済的要請を変化させることほど困難なことはない。というのは、ラスキによれば、「それは、人間の最も深い感情にひびく。それは、人間の習性の最奥の根底に、人間の安心感に、さらにまた、古いからこそ慣れている正邪の観念に、触れる」⁽⁵³⁾からである。しかも、ラスキによれば、「ある善の観念に慣れてきた権力階級というものは、その善の観念が自分たちの眼前の必要にもはや適しないことを認めるよりも、むしろそれを擁護するために戦うものである。」⁽⁵⁴⁾

7. 法 と 倫 理

およそ、われわれが法という観念を用いる場合には、ラスキによれば、三つの異なった意味を区別しなければならない。⁽⁵⁵⁾

すなわち、第一は、形式的・法学的な意味の法であって、これは、最終的には主権の権威に依存して、ある決定を強制しようとする意志の宣言以上のものではない。第二は、政治的意味の法であって、これは、第一の形式的な宣言としての法が、適用を受ける人々から承認されることによって効力を与えられるものである。第三は、倫理的意味における法であって、この意味においては、宣言された決定が従うべきものであるとされるのは、その決定の目的を遂行することが道徳的に正しいからである。

ところで、以上三つの意味のうちで、第一の形式的、第二の政治的な意味の法に対しては、市民が服従すべき本来の義務をもたないことは、明らかである。というのは、たとえば、ラスキによると、ヒットラー国家の命令は、有効に施行され、その国家に支配されていた住民たちにより承認されたという意味では、もとより法であったが、しかし、自主的に判断を下しうる地位にある大多数の人々は、おそらく、それらの命令を倫理的に非法なものと見なすだろうからである。力は、いかに強くても^{マイト}権利にはならない。法が有効に施行されて

も、倫理上の適不適の問題は、依然として未解決のままに残るのである。⁽⁵⁶⁾

つまり、法について形式的な権能も、政治的な権力も、正当な服従を要求する権利は与えることができない。法が倫理的に効力をもつためには、国家がその目的を維持するために存在している諸権利の体系の要求するところに、法が一致しなければならない。しかも、法は、私の行動をある特定の仕方で統制しようとする命令であるから、したがって、その命令が諸権利の体系の要求と一致しているか否かは、倫理上の適不適のテストとして、自分で判断しなければならない。すなわち、ラスキによると、「有効な法の根底は、個人の良心のうちにあって、しかも、そこにしかありえないのである。」「いわば、私は、法の施行に自分の良心の同意を与えることによって、その法を合法的なものとするのである。」⁽⁵⁷⁾

ところで、「このような見解は、服従を拒否することを正しいとすることになるから、無政府状態への門戸を開く。」といわれたならば、ラスキは、「その非難は正しい。」⁽⁵⁸⁾ という。ラスキによれば、もともと、諸国家の生活においては、無政府状態への門戸は、いつでも開かれているのである。というのは、誰も人は無条件的に権力の賦与を許そうとは、決してしないからである。

「ある国家に、その任務を積極的に達成させるためには、国家の命令がその任務に反すると思われるかぎり、人々は命令に対する服従を拒否するものである、ということを、その国家に知らしめる以外に方法はないのである。」⁽⁵⁹⁾ だから、真の自由の秘訣は、まさに勇気なのである。「不断の監視が、自由の代償である。」⁽⁶⁰⁾ そして、道徳的判断を下す義務を放棄することは、われわれ自身を奴隷に売ることにはほかならないのである。⁽⁶¹⁾

こうして、ラスキにおいては、「法の尊重は、常に法がなすところのことに對する尊重を意味しなければならない。」⁽⁶²⁾ だから、「もしも個人が、単独で、あるいは他の人々とともに、その法のなすところのことが倫理的に我慢のならないものであると判断したら、彼は自分の判断に基づいて行動すべきである。」⁽⁶³⁾ さらに、ラスキは、これに付け加えて、「これと異なる判断を下すこ

とは、個人の最高の義務は、維持せられる秩序の質にかかわりなく、ただ秩序を維持することである、と主張するのと同じである。私は、このような主張が、個人を道徳的存在と見る考え方と両立することができる、とは思わない。」⁽⁶⁴⁾ といっている。

要するに、「有効な法とは、それが人々の同意を求めるとき、人々から適当であると判断された法のことである。」⁽⁶⁵⁾ つまり、「法が服従を要求しうるか否かは、人々がその法の自負するところが正当か否かについて下す判断によって決定されるのである。」⁽⁶⁶⁾

ラスキは、かくして、純粹に実証的な法理論が適当な政治義務の哲学を与えうる、ということを否定するとともに、また、ある一定の時ににおいて現実の法が「あるべき法」と必然的に同一視されうる、という理想主義的法律観をも否定するのである。そして、法と正義の間、「ある法」と「あるべき法」との間には、何らアプリオリな関係もないから、市民個人の判断こそ、そこに法が同意を要求する権原を見い出すべき基盤である、というのである。⁽⁶⁷⁾

このような考えは、ラスキみずから認めているとおり、われわれを一つの懷疑主義に導くものであるが、しかし、ラスキによれば、人々が政治的権利について種々異なる見解を採るのは、社会における人々の地位が異なり、そのうえ、人々の要求権が不平等である以上、やむをえないことといわねばならない。そもそも、「価値判断のうえでのわれわれの相違は、大部分が、実は、われわれが直面する異なった社会的条件の関数なのである。」⁽⁶⁸⁾

したがって、ラスキによれば、「常に具体的な状態のもろもろの事実に依存する『もし』と『しかし』とがある」にもかかわらず、カントやケルゼンなどのように、法理論に対する形式主義的な企てを行なっても、それが、すべて失敗に帰するのは、当然である。⁽⁶⁹⁾

ラスキによれば、いかに困難なことであるにしても、「社会的善の客観的判定基準へのあらゆる接近、したがって、政治義務の基礎の全体は、結局のところ、社会における平等の増加の関数である。」⁽⁷⁰⁾ つまり、「人々の生活が異な

れば、考え方も異なる。したがって、人々がきわめて異なった生活をしているために、人生を同じような目で見ることが望めないようなところでは、社会に恒久性と安定性を与える統一は、達成できないのである。」自由を妨げる「不平等という毒」を排除することこそ、適正な政治義務の基盤なのである。(71)

そして、自由とは、ラスキによれば、消極的には、「現代文明において個人の幸福を保障するのに必要な社会的諸条件に何ら制限・拘束のないことを意味する」(72)が、積極的には、「自由とは、人々が最善の自己となる機会をもつような雰囲気熱心に維持することである。」(73)「個人の良心」を最後の判定者とするラスキは、自由の尊重、自由に対する尊敬こそ、人生を美しいものとする、と説くのである。

8. お わ り に

さて、以上において私は、法と倫理についてのラスキの見解を彼の国家論に視点をおきながら眺めてきたが、ここで、二三の点について、いささか私見を述べてみたいと思う。

まず、国家と社会を厳別するラスキの多元的国家論の立場についてであるが、彼みずからは、後に『国家論の危機』において、多元的国家論はマルクス主義的国家論にいたる一つの段階であった、と告白している。(74)しかし、それはともかくとして、「それがなければ、いかなる人も最善の自分自身であろうと求めることができない社会生活の諸条件」(75)である「権利」について、ラスキは、「我々の権利は、社会から独立して無関係ではなく、社会に固着している」(76)が、「国家は、権利を創造するものではなく、権利を認容するものである。」(77)したがって、むしろ、「権利は国家によって認容されようが認容されまいが、国家の妥当性がそこから引き出されるものであるという意味において、国家に先行しているのである。」(78)といっている。

すなわち、ラスキにおいて、権利は、国家にではなく、社会に存在根拠があ

るのであって、国家は、社会において存在する個人の権利を保持するための一つの利益結合社会にほかならない。権利存在の根拠を国家と区別された社会におくことは、国家の無制約的優越性を否定するとともに、さらに国家の成員による国家批判の論拠を設けることになるのである。ところで、すでに、この点については、ラスキもしばしば他の関連で言及しているトーマス・ヒル・グリーン (Thomas Hill Green, 1836~1882) が、その『政治義務の原理』(“Lectures on the Principles of Political Obligation,” 1895)⁽⁷⁹⁾ のなかで、「人は、権利をまったく国家の一員であることなしに、家族またはそのほかのどのような形態であっても人間社会の一員として、もつのである。」⁽⁸⁰⁾ あるいは、「権利はその存在を、人々相互が公共の善い状態(福祉)に寄与する能力があるものとして認容する人々の社会に依存するのであって、社会が国家の形態をなしていると考えることに依存するのではない。」⁽⁸¹⁾ と喝破しているのである。

グリーンによれば、権利の存在は、国家と必然的關係はなく、権利を認容する根拠である公共善の意識があるところ、家族の成員間、家族と家族との間、部族と部族との間に、すでに権利は存在しうるのである。だから、「国家は、権利を創造するのではなく、すでに存在している権利にいつそうじゅうぶんな実在性を与えるのである。」⁽⁸²⁾ すなわち、「国家は、権利を前提にし、権利を保持するための制度である。」⁽⁸³⁾ 私は、ここに、別の拙論ですでに述べたように、グリーンを多元的国家論の先駆的存在として位置づけることができると考えるのであるが、それはともかく、このようにして、グリーンにおいては、国家は、その成員の諸能力を実現するのに必然的な制約である権利を、いつそう完全に、いつそう調和的に保持するための制度にほかならない。そして、ここに、グリーンは、国家という一つの社会制度の道徳的意義を見出しているのである。したがって、グリーンにとっては、「社会に反抗する権利」⁽⁸⁴⁾ とか「非社会的に行動する権利」⁽⁸⁵⁾ とかいうことは、ことばの矛盾にほかならないが、「国家に反抗する義務」⁽⁸⁶⁾ は、道徳的存在としての個人が権利を享受しようとする必然の発露にほかならないのである。

ラスキは、グリーンと同様に、権利の存在根拠を国家にではなく社会に求めているのであって、この点は、国家の理念や法と倫理の関係などを考察する場合に、きわめて重要な鍵となるのである。すなわち、個人の権利を正当化する論拠として、国家と社会を明確に区別することは、ボザンケのような政治義務と道徳的義務の安易な同一視を否定するとともに、ヘーゲルのいわゆる法と道徳との総合としての人倫の概念を拒否するばかりでなく、さらに、かえって、権利の存在根拠としての社会によって、権利を保持するための制度としての国家の行動の妥当性を測定することを可能にするのである。かくしてこそ、国家の法的全知全能性や、個人のうゑに君臨する国家のレヴァイアサンの併呑性は否定できるのである。ラスキが、権利の存在根拠について国家と社会とを厳別したことは、きわめて大きな意義をもつといわなければならない。

次に、国家行動や法を批判する最後の判定者としてのラスキのいう「個人の良心」についてであるが、市民の政治義務の原理ないし個人の遵法の最終的な基盤は、法の形式的および政治的な意味にはなく、法の倫理性にあるとするラスキの主張は、その文脈に即してみるかぎり、少しも異議を称えられるどころか、まったくそのとおりだと首肯しないわけにはいかないし、自由を最も尊いものとして尊重する個人主義的自由主義者ラスキの真骨頂が如実に感得させられるのである。しかし、ひるがえって、法の倫理性を究極的に判断する「個人の良心」とは何かを考えるとき、私どもは大きな問題に直面させられるのではなからうか。

すなわち、ラスキによれば、法を法として有効なものとする根底は、個人の良心のなかにあるが、ラスキみずから自認しているように、私どもの直面している社会的条件が異なるために、その関数として、私ども個人の行なう価値判断は、当然異なるのである。つまり、社会的な善の客観的な判定は、個人の（良心に基づく）見解の多様性、価値判断の多元性のために、きわめて困難であるといわなければならない。そこで、ラスキは、「人生を同じような目で見ること」ができるようにするために、「社会における平等の増加」を願ひ、

「不平等という毒」を排除することが、個人の良心に基づいて法の倫理性を究極的に判断する場合に確保しなければならない客観性の基盤である、と主張するのである。

しかし、個人の良心は、「社会における平等の増加」によって、その多様性を解消させられるものであろうか。個人の良心とは、もともと、社会的にはもちろん、歴史的にも異なる歴史的・社会的な性格を一面にもつものではないだろうか。ラスキ自身も、個人の良心を時と所を越えて相変わることなき実体だと考えているようには思われないのである。今世紀最大の哲学者バートランド・ラッセルの言を借りれば、「良心は、それ自体では、無政府的な力であって、どのような政治体系も良心に頼って築きあげることはできないのである。」⁽⁸⁷⁾とすれば、実はここから、主体的な人間の理想的な生き方を究明する倫理学や有効適切な政治哲学が始まるのではないか。しかも、——やや、飛躍しすぎると思われるかも知れないが、——

“If you're certain, you're certainly wrong, because nothing deserves certainty, and so one ought always to hold all one's beliefs with a certain element of doubt and one ought to be able to act vigorously in spite of the doubt.”⁽⁸⁸⁾

と語った徹底的懐疑主義者バートランド・ラッセルが、その倫理的意見において、はじめは自然主義を否定するムーア (G. E. Moore, 1873~1958) の直覚主義の立場に立ちながら、やがて倫理的判断を主観的な感情・態度の表現とする情緒主義の考えに移っていったことに、⁽⁸⁹⁾ いわば象徴的に見られるように、「個人の良心」の問題も、価値の究極的裁定の根底にかかわる問題として、もはや、政治や倫理の次元にのみ止まるかぎり、解決できない永遠の謎ではなかろうか。とすれば、その解決を政治学者ラスキに、これ以上求めることは、酷であらう。

しかし、それにしても、ラスキが、国家や法律について、その理念と現実を浮きばりにし、国家と社会を厳別することによって、真の個人主義的自由主義

の立場から、国家や法津の妥当性・有効性を検討していかうとした科学的および哲学的な分析の態度と成果は、実にすばらしく、高く評価しなければならないのではなからうか。

注

- (1) Harold J. Laski: *The State in Theory and Practice*, 1935, George Allen & Unwin Ltd. 石上良平訳『国家—理論と現実—』(岩波書店)
- (2) 拙論「善とは何か——ハロルド・J・ラスキ研究——」(拙著『人間性と倫理』所収) pp. 76~77
- (3) Harold J. Laski: *The State in Theory and Practice*, pp. 18~19
- (4) Ibid., p. 25
- (5) Ibid., p. 27
- (6) Ibid., p. 29
- (7) Ibid., pp. 33~34
- (8) Ibid., p. 34
- (9) Ibid., p. 35
- (10) Bernard Bosanquet: *The Philosophical Theory of the State*, 1899, 3rd ed. 1920, Macmillan and Co., Limited
- (11) Ibid., p. 51
- (12) Ibid., p. 95
- (13) Ibid., p. 117
- (14) Ibid., p. 118
- (15) Ibid., p. 172
- (16) Ibid., p. 139
- (17) Ibid., p. 140
- (18) Ibid., p. 139
- (19) Ibid., p. 141
- (20) Leonard Trelawney Hobhouse: *The Metaphysical Theory of the State — A Criticism*, 1918, George Allen & Unwin Ltd.
- (21) Ibid., p. 17
- (22) Ibid., p. 27
- (23) Ibid., p. 23
- (24) Ibid., p. 57

- (25) Ibid., p. 77
- (26) Ibid., p. 29
- (27) Ibid., p. 81
- (28) H. J. Laski : The State in Theory and Practice, pp. 57~58
- (29) Ibid., p. 58
- (30) Ibid., p. 60
- (31) Ibid., p. 61
- (32) Ibid., pp. 67~69
- (33) Ibid., p. 69
- (34) Ibid., p. 73
- (35) Ibid., pp. 73~74
- (36) Ibid., p. 331
- (37) Ibid., p. 104
- (38) Ibid., pp. 80~81
- (39) Ibid., p. 63
- (40) Ibid., p. 64
- (41) Ibid., p. 108
- (42) Ibid., p. 109
- (43) Ibid., p. 109
- (44) Ibid., p. 110
- (45) Ibid., p. 118
- (46) Ibid., p. 135
- (47) H. J. Laski : The Crisis in the Theory of the State, p.x (Introductory Chapter, in "A Grammar of Politics" 1938, George Allen & Unwin Ltd.)
- (48) Ibid., p. vii
- (49) Ibid., p. vii
- (50) Ibid., p. vii
- (51) H. J. Laski : The State in Theory and Practice, pp. 327~328
- (52) Ibid., p. 329
- (53) Ibid., p. 330
- (54) Ibid., p. 324
- (55) Ibid., p. 81
- (56) Ibid., p. 82
- (57) Ibid., p. 82
- (58) Ibid., p. 83

- (59) Ibid., p. 83
- (60) H. J. Laski : *Liberty in the Modern State*, 1948, George Allen & Unwin Ltd. 飯坂良明訳『近代国家における自由』(岩波書店刊) p. 77
- (61) H. J. Laski : *The State in Theory and Practice*, p. 83
- (62) Ibid., p. 85
- (63) Ibid., p. 85
- (64) Ibid., p. 85
- (65) Ibid., p. 94
- (66) Ibid., p. 94
- (67) Ibid., p. 95
- (68) Ibid., p. 99
- (69) Ibid., p. 99
- (70) Ibid., p. 102
- (71) Ibid., p. 102
- (72) 飯坂良明訳『近代国家における自由』p. 48
- (73) H. J. Laski : *A Grammar of Politics*, p. 142
- (74) Ibid., p. xii
- (75) Ibid., p. 91
- (76) Ibid., p. 94
- (77) Ibid., p. 89
- (78) Ibid., p. 91
- (79) Thomas Hill Green : *Lectures on the Principles of Political Obligation*, 1895, New Impression 1924, Longmans, Green and Co.
拙論「道徳と国家——トーマス・ヒル・グリーン哲学——」(拙著『人間性と倫理』所収)
- (80) T. H. Green : *Lectures on the Principles of Political Obligation*, p. 141
- (81) Ibid., p. 148
- (82) Ibid., p. 134
- (83) Ibid., p. 138
- (84) Ibid., p. 99
- (85) Ibid., p. 138
- (86) Ibid., p. 107
- (87) Bertrand Russell : *Human Society in Ethics and Politics*, 1954, 4th ed. 1971 George Allen & Unwin Ltd. P. 34
- (88) Bertrand Russell : *Bertrand Russell Speaking*, The Hokuseido Press,

pp. 8~9

- (89) Bertrand Russell: The Elements of Ethics, Footnote on P.13, in
"Readings in Ethical Theory" edited by W. Sellars & J. Hospers,
1970, Appleton-Century-Crofts.